

平成28年度に係る業務の実績に関する評価結果
国立大学法人筑波技術大学

1 全体評価

筑波技術大学は、聴覚・視覚障害者のための高等教育に関する我が国の中心的役割を果たすことを基本的目標として、社会自立できる産業技術・保健科学・情報保障学の専門職業人を養成することを目指している。第3期中期目標期間においては、障害や専門性に即したアクティブラーニングの手法によりグローバル社会に適応できる人材を育成するとともに、聴覚・視覚障害教育分野に関する国際的水準の研究を展開し、国内外の研究をリードすることに加え、障害者の教育、支援に関する知見を広く国内外に発信し、障害者の能力向上と社会のバリアフリー化、ユニバーサル化に寄与し、障害者の能力を十分発揮できる社会の実現に貢献することを目指している。

この目標達成に向け、学長のリーダーシップの下、教職員の障害学生支援に係る資質能力の向上を図っているほか、東京オリンピック・パラリンピックに向け、部局を越えたプロジェクトチームの形成と研究成果の社会への還元に取り組むなど、「法人の基本的な目標」に沿って計画的に取り組んでいることが認められる。

2 項目別評価

<評価結果の概況>

	特 筆	一定の 注目事項	順 調	おおむね 順調	遅れ	重大な 改善事項
(1) 業務運営の改善及び効率化			○			
(2) 財務内容の改善			○			
(3) 自己点検・評価及び情報提供			○			
(4) その他業務運営			○			

I. 業務運営・財務内容等の状況

(1) 業務運営の改善及び効率化に関する目標

①組織運営の改善 ②教育研究組織の見直し ③事務等の効率化・合理化

【評定】中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載24事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められるとともに、平成27年度評価及び第2期中期目標期間評価において評価委員会が指摘した課題について改善に向けた取組が実施されているほか、下記の状況等を総合的に勘案したことによる。

平成28年度の実績のうち、下記の事項が注目される。

○ 教職員の障害学生支援に係る資質能力の向上

教職員の基本的な障害学生支援に係る資質能力の向上のため、試行的に、手話や筆談ボードを使ったグループトークを行うCCサロン(コミュニケーションサロン)を実施している。サロン形式で双方向のコミュニケーションを行うとともに、話者交代の方法や注目の集め方等の手話の様々なスキルの提供も含めた会話を実践しており、教職員延べ66名、学生延べ27名が参加し、聴覚障害学生とのコミュニケーション能力の向上に取り組んでいる。

(2) 財務内容の改善に関する目標

①外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加 ②経費の抑制 ③資産の運用管理の改善

【評定】 中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載11事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められるとともに、下記の状況等を総合的に勘案したことによる。

平成28年度の実績のうち、下記の事項が注目される。

○ 東西医学統合医療センターにおける収入増に向けた取組の実施

保健科学部附属東西医学統合医療センターにおいて、西洋医学と東洋医学を統合した医療の提供を目指し、従来 of 神経、筋疾患領域に加え、産婦人科領域においても西洋医学と東洋医学の関連治療を実施しているほか、患者のニーズ及び運営や経営における情報分析等に基づき、リハビリテーション科において心大血管疾患リハビリテーション料の施設基準の認定を受けている。これらの取組の結果、収入は1億1,600万円（対前年度比0.8%増）、患者数は19,621名（対前年度比3.4%増）となっている。

(3) 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標

①評価の充実 ②情報公開や情報発信等の推進

【評定】 中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載5事項全てが「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

(4) その他業務運営に関する重要目標

①施設設備の整備・活用等 ②安全管理 ③法令遵守等

【評定】 中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載12事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

Ⅱ. 教育研究等の質の向上の状況

平成28年度の実績のうち、下記の事項が注目される。

○ 大学独自の自己学習教材による学生支援

あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師国家試験対策のために、視覚障害学生が利用しやすいように自己学習教材「こくしくん」を大学独自で作成している。「こくしくん」はPC、スマートフォン、タブレット型多機能端末上で動作可能な教材であり、国家試験の過去問題をデータベース化しているだけでなく、音声読み上げ機能、音声入力機能等の支援ツールも備えており、主に鍼灸学専攻の4年次生の国家試験の自己学習教材として活用されている。

○ 他大学との連携による障害学生への支援体制の構築

熊本地震での被災に関して、九州ルーテル学院大学に対し、東北福祉大学、宮城教育大学、同志社大学、大阪教育大学の4大学との連携により、筑波技術大学にて独自に開発した遠隔情報保障システムを活用した支援等を実施している。遠隔情報保障システムとは、聴覚障害学生が授業を受ける際に支援を行うシステムであり、授業の字幕データや手話通訳映像について、インターネットを通してPC等で受信できる仕組みとなっている。当該プロジェクトについて、筑波技術大学はプロジェクト全体のコーディネートや統括指揮を担当し、支援体制の構築を実施している。

○ 部局を越えたプロジェクトチームの形成と研究成果の社会への還元

東京オリンピック・パラリンピックに向け、ブラインドサッカーを中心とした視覚障害者の選手育成及び医・科学的サポートを行うため、3名の教員をブラインドサッカー日本代表スタッフ（分析担当のコーチ、ドクター、トレーナー）として派遣している。また、障害者スポーツ競技団体に対し、特に茨城県内のボッチャ競技に対する選手育成及び医・科学的サポートを実施しているほか、聴覚障害者スポーツへの支援として4競技団体に体力評価を含めた医・科学的サポートを実施し、聴覚障害者のための総合スポーツ競技大会であるデフリンピックに向けた支援体制を構築している。